



ブック

溝上氏は高校生
の学習や生
活が、大学で
の学びや社会に
出た後の仕事や
人生に与える影
響を明らかにす
るため、201

3年に全国の高校2年生約4万
5千人から回答を得た。その後、
大学1、2、4年、
社会人3年目の、
約10年間の追跡
調査を行うこと
にしている。

本書のキーワ
ードは（学校か
ら社会への）「ト
ランジション」
（移行）である。

「教室外学習」
「対人関係・課
外活動」「キャ
リア意識」の重要性が示唆され
たという。また、対人関係力の
弱い生徒は、知識習得型からア
クティブ型への学習の「拡張」
についていけないという新たな
仮説も提示している。

溝上氏は、クラスター分析に
より、「勉学」、「勉学そこそこ」、
「部活動」、「交友通信」、「読書マ
ンガ傾向」、「ゲーム傾向」、「行

どんな高校生が 大学、社会で 成長するのか

「学校と社会をつなぐ調査」からわかった
伸びる高校生のタイプ

溝上 慎一 著
京都大学教育学部研究開発推進センター・河合塾 編

溝上 慎一 責任編集／京都大学高等教
育研究開発推進センター・河合塾 編
2592円 学事出版 03-3255-5471

どんな高校生が大学、 社会で成長するのか

立が大学生になってからの主体
的態度につながるかどうかを今
後の追跡調査の課題としている。
評者は、高校生から大学生へ
の「移行」において、部活動の
積極性を越えたレベルでの自己
開発と社会的関与に関する態度
変容が求められるのではないかと
思う。

（聖徳大学教授・西村美東士）

事不参加」の7タイプを導き出す。
勉学タイプは、8割が部活動
と両立しており、「よく学び、将
来に向けて頑張り、自己成長を
実感している」タイプとされる。
しかし、大学生については、氏
は他著で、社会人調査の結果から、
大学在学時に勉学第一とした者
は、仕事では良い成果を出して
いないと指摘する。組織での成
功のためには、

学生時代に良好
な友達つきあい
以上の、質の豊
かな人間関係に
よる、異質な他
者からの影響が
大きいというの
だ。どちらも実
感できる話だ。

氏は、勉学タ
イプにおける部
活動と学習の両